

「南極料理人」



2009（平成21）年8月30日鑑賞<テアトル梅田>

監督・脚本：沖田修一

原作：西村淳

西村淳（調理担当）／堺雅人

本さん（雪氷学者）／生瀬勝久

タイチョー（気象学者）／きたろう

兄やん（雪氷サポート隊員）／高良健吾

ドクター（医療担当）／豊原功補

主任（車両担当）／古舘寛治

盆（通信・機械担当）／黒田大輔

平林（大気学者）／小浜正寛

西村みゆき（淳の妻）／西田尚美

西村友花（淳の娘）／小野花梨

KDD清水さん／小出早織

スズキ／宇梶剛士

船長／嶋田久作

2009年・日本映画・125分

配給／東京テアトル

<淡々とした日常だって、面白く描けば映画に>

本作の原作は、現実に海上保安庁在任中に2度南極観測隊員に選ばれ、1997年からの38次隊では、地球上最も苛酷といわれる平均気温-57℃（当時）のドームふじ基地で越冬した西村淳が、その毎日を綴った爆笑エッセイ『面白南極料理人』。

パンフレットによれば、「とりとめのない話だけどももしろい」と考え、また「エッセイなので小説や漫画より自由に作れるんじゃないかと」考えて脚本を書き、監督したのが沖田修一。沖田監督は、「脚本を書く時は、筋を作るというよりはまずおもしろい話のオンパレードにしようと思いました」とのことだが、その狙いどおり、本作は面白い話のオンパレード。なるほど、なるほど。私は映画はドラマがなくちゃと思っていたが、淡々とした日常だって、それを面白く描けば映画になることが、本作を観ればよくわかる。

<主役は8人のサムライたち>

本作の主人公はタイトルとなっている南極料理人の西村淳（堺雅人）だが、彼がなぜ第38次越冬隊の調理担当として海上保安庁から派遣されたのかについてのウラ話が、哀しくかつ面白い。本作の主役は、一人一人の紹介は避けるが気象学者のタイチョー（きたろう）以下8名の個性的な隊員たち。男8人だけで1年間も同じ室内で生活を共にするのは、そりゃ大変。またそこは気圧が低い極寒の地であるうえ、気晴らしや気分転換もすべて8人と一緒。しかも本作を観ていると、確かに食材は立派だがトイレ設備は最悪。これでは出るものも出ないのでは？

外部との連絡は、1分間700円を越える電話。雪氷サポート隊員の兄やん（高良健吾）は毎日のように恋人に電話しているが、どうも話が弾まない。そう思っていると、ある日「私好きな人ができたの」ときつい一言が返ってきたから、兄やんが落ち込んだのは当然。そんな外部とのドラマも少しはあるが、本作で描かれるのは99%が現地における隊員たちのエピソード。したがって、本作の主役はこの8人の隊員たちだが、実は本当の主役はフードスタイリストの協力を得てスクリーン上に展開される料理の数々だ。伊勢海老を使った巨大なエビフライや、豪快に焼き上げるローストビーフの肉塊の豪華さは突出しているが、ごく平凡な朝ごはんの数々、おにぎりや豚汁、さらには回転卓で食べる中華料理のフルコース(?)なども美味しそう。もっとも、カニは高級食材だが、あれだけタブリのカニを見ていると「カニだけはもういいワ」となりそう？

<深読みその1 食材準備のミスマッチはなぜ？>

食材を主役とした本作のストーリーの軸の1つがラーメン。そしてまた、「ボクの身体はラーメンでできている」というタイチョーの個性。本作には「ラーメンがなくなりました」と西村が報告するシーンが登場する。これは夜毎部屋から抜け出して調理室でラーメンを食べている奴がいるためだが、それがタイチョーらしい。本作は体験を元にしたエッセイを映画化したものだからウソはないと思うのだが、少し深読みをすれば納得できないことがいくつかある。本来、本作は沖田監督の狙いどおり面白いエピソードを楽しめばいいだけなのだが、ヘソ曲がりの私はそんなシーンが延々と続くと、つい深読みをしてしまう。

その第1は、越冬隊の食材に隊員の好みは反映されないの？ということ。納豆はダメ、そばアレルギーあり、朝食はパン党etc、食の好みは人それぞれだから、冷凍、乾燥、缶詰を基本とする食材選びにもそれを反映させなければならないはずだ。現に娯楽面では、麻雀組、卓球組、将棋組、トライアスロン組など好みに応じて娯楽品を持参している。だとすれば、これほど極端なラーメン好き、というよりラーメンがなければ仕事もできないし生きていくことすらできないような隊員に合わせて、大量のラーメンを持参しなければ。

<深読みその2 水が貴重品なのは当然だが>

「氷はあっても水はない」という標語を見るまでもなく、ドームふじ基地では水が貴重品であることはよくわかる。しかし、あれほど豊富な食材を貯め込んでいるのだから、大型のペットボトルの水を大量に持ち込むことは十分可能なのでは？

健康で文化的な最低限度の生活を営むためには、豪華な食材以上にトイレや水が大切。みんなに隠れて豪快にシャワーを使う車両担当の主任（古舘寛治）の規範意識の欠如は大問題だが、せめて水くらいはあまりケチらないですむようにしてあげなければ。

<深読みその3 ホントに仕事してるの？>

映画の冒頭、西村のナレーションによって8人の隊員たちの任務・役割が説明される。しかし、掘削場で1本1000万円以上するという何万年も昔の氷を取り出している雪氷学者の本さん（生瀬勝久）以外、それぞれ何の仕事をしているのかサッパリわからないのが本作の難点？気象、大気、氷を中心とした日々の観察やデータ集めがどれくらい大変な作業なのか、本作ではサッパリわからない。

また、一連のラーメン騒動があるアイディアによって解決した時、オーロラの観察以上に伸びないうちにラーメンを食べることを優先している姿を見ると、こんな越冬隊で大丈夫？と思わず心配になってくる。西村が1番まともに見えるくらいだから、8人のサムライの個性はそれぞれ突出している。しかし、それは仕事ができないことを意味するのではなく、むしろ逆の場合が多い。そう考えればドームふじ基地における日本の越冬隊に私も誇りをもつことができるのだが、彼らはホントに仕事してるの？

<深読みその4 もう1つの欲の処理は？>

本作には、真っ赤なレオタードに身を包んで隊員たちにエクササイズのお手本を示すビデオテープが登場する。隊員たちは彼女たちの動きに合わせてそれぞれ手足や腰を動かしているのだが、隊員たちの目が注がれている箇所は一体どこ？男ばかり8人による1年間の共同生活、しかも逃げていく場所はなし、という境遇では食べることの楽しみが重要なことは当然だが、もう1つの欲の処理は？持参するビデオテープも、エクササイズ教本のような上品なものではなく、もう少し生々しいものが必要なのでは？さらに去る7月9日に観た是枝裕和監督の傑作『空気人形』（09年）のような、性欲処理の代用品のようなものも必要なのでは？

隊員たちのエピソードを並べ、面白い話のオンパレードで映画をつくるという沖田監督の狙いはわかるが、食欲以外のもう1つの欲も少しは描いてほしかったと思うのは私だけ？